

一般部門

寝なさい

まつおか く に こ
【東京都・松岡久仁子】

一般部門
入選

病院の看護課長をしていた私の母の、家庭看護の基本は、ごくあっさりしたものだった。医療の専門家だから、さぞ手厚く、医学的に高度な看病をしてもらっているに違いないと誤解されやすいが「寝なさい」の一言だけだった。テレビドラマで見るような、濃厚な看護や心配を受けたことは一度もない。「寝れば治る」というのは、多忙な母の言い訳のようにも聞こえた。

父が晩年、脳梗塞の発作を起こし、入退院を繰り返した。その度、私は学校帰りに、母は仕事帰りに、父の病室に集合し、大体はだまって本などを読んで、父の食事につきあい、面会時間の最後まで過ごした。「じゃあね」と言って父と別れ、父はだまってベッドから小さく手を振る。そして私と母は帰宅途中で食事をして帰るのだった。病室での母は、ただ時間をつぶしているような感じに見えた。

だから、三度目の発作の後、父が退院して、母がこう言ったときには心底驚いた。

「父上がじっと天井のカーテンレールを見ていた時があったでしょう。あの時は怖かった。たぶん、死を意識していたと思う」

さらに退院してきた父が、こう言った時も驚いた。

「母上はああいう女だが、いいところもある。毎日、仕事の前に、私のことを祈って、お百度参りをしていたんだぞ」

家族として病室に居る、高度でも濃厚でもない看病の、父と母の、心の広げ方を、私は見破れなかった。

医学には限界がある。健康にも人生にも限界があり、また病気にも限界がある。その限界を越えようとする時、私たちは祈るように心を広げるしかない。

「寝なさい」と言った母の言葉の後ろには、どれほどたくさんの想いが込められていたことだろう。病気の体を休ませ、だまって見守り祈る。ただ、それだけが尊い場合もあるのだ。